

「底が突き抜けた」時代の歩き方 429

入隊拒否に立ち上がったイスラエルの高校生たち

『イスラエル 兵役拒否者からの手紙』には、《命令の正統性には異を唱えるが、命令の合法性は認めることを前提にしてい》る選択的兵役拒否運動、すなわち、イエシュ・グブウルの「拒否宣言」と「兵士への呼びかけ」が掲載されている。「拒否宣言」には [2000年9月の第2次インティファダ開始とともに、イエシュ・グブウルは下記の請願を行い、数百人の予備役兵の署名を集めた] と記述され、次のように高らかに呼びかけられている。

《パレスチナの自治は見かけ（占領地全体の5分の1以下）だけであり、実際には占領状態が続いている。30年以上にわたる占領と弾圧も、パレスチナ人の民族独立の闘いを止めることはできなかった。イスラエル政府により遂行された戦闘 - アリエルやベテル入植地の防衛のための戦闘、あるいはヘブロンのイタマールやベイト・ハダサの非道な戦闘、ネツァリムやキリヤット・アルバの占領継続のための戦闘、ベツレヘムにあるラケル廟やネビ・サムエルの支配継続をめぐる戦い - これらは我々のための戦いではない。

ここに署名した我々は、イスラエル国防軍兵士である。我々は、占領地でパレスチナの人々への継続的な弾圧に加担しないこと、そして結果としてパレスチナの人々を弾圧することとなる入植地での警備や防衛には関与しないことを宣言する。》

「兵士への呼びかけ」の文面はこうである。

《兵士よ、誰もが自分の国を守りたい。テロはもうたくさんだ。皆が平和を望んでいる。けれど、我々がしていることは、殺戮の連鎖を終わらせる方向へ向かっているだろうか？

1967年以来、イスラエルは350万人のパレスチナ人を支配し、力づくの占領によって彼らの暮らしを揺さぶり、彼らの人権を踏みにじり続けてきた。占領政策はイスラエルの安全をさらに脅かしただけだった。今、占領政策の結果、一人ひとりの生命が危機にさらされている。あなたの生命もだ！

兵士よ、変えるのはあなただ！

自分に問いかけてみてほしい。軍隊でのあなたの行動は、果たして国家の安全に役立ったのか？ 我々と、我々の隣人であるパレスチナの人々との間に憎しみと暴力を募らせただけではなかったか？

暴力は止められる。

兵士よ、占領がテロを生んでいる。

「掃討作戦」と呼ばれる違法な殺戮に加わる。住宅を破壊する。非武装の一般市民や住宅に銃撃・砲撃をする。果樹を根こそぎにする。食糧の供給や医療を妨害する - そんなとき、あなたは第4次ジュネーブ条約などの国際法およびイスラエルの法律により戦争犯罪と規定された行動に加わっていることになる。すでに40年前、イスラエルの法廷では、兵士に対して明らかに違法な命令に従うことを禁じる判決を出した。

兵士よ、あなたは、このような戦争犯罪が、正当なものだと思うか？

「掃討」が自爆行為の引き金になっていないか？ 家を破壊し、家財すべてをめちゃめちゃにすることは正当か？ 子ども、女性、老人を殺すこと、武器を持たない市民を殺すことは正当か？ 村中の人々を飢えさせ、医療を受けられないようにすることが、「安全」の名の下に正当化できるだろうか？

兵士よ、占領政策のもとで日常の一部になってしまっている、抑圧のくり返し - 外出の禁止、交通の封鎖、土地の没収、就業や就学の阻害、検問でのごまかしや侮辱、家屋への暴力的な搜索 - これらが、我々に対する憎しみの火に油を注いでいるのではないか？ 占領を終わらせよう、殺戮の連鎖を止めよう！

兵士よ、占領は生命を奪っている。

防衛にかかわる複数の主要人物が、テロを軍事的に解決することはできないと認めている。

「この1年間に我々が行った予防策はすべて、海の水をすべてティースプーンで掻き出そうとするようなものだった」。防衛筋の高官がこう語っている（2001年12月19日のハアレツ紙より）。秘密警察の前長官アミ・アヤロンもこう言う。「指導者たちを殺してもイデオロギーを殺すことはできない」

兵士よ、占領されて、それに抵抗しない人々が世界のどこにいるだろうか？

もしあなたがパレスチナ人の立場に置かれたとしたら、支配者に喜んで頭を下げるだろうか？ 2年前には、イスラエルは、レバノンの南部の占領が、我々の安全にとってきわめて重大だと確信していた。20年前にはシナイ半島の占領が我々の安全を保障すると考えた。しかしそれらの地域ではイスラエル軍の占領が終結したおかげで、我々の兵士たちの血がこれ以上流れるのを避けることができた。

今回のインティファダが始まって以来、1000人以上のイスラエル人とパレスチナ人が死に、そのほとんどは戦闘には何らかかわりのない非武装の市民だった。占領地区を手放さない限り、我々は、我々自身の血と、パレスチナの人々の血とを流し続けることになるだろう。占領を終わらせよう、殺戮を止めよう！

兵士よ、占領は我が国を蝕んでいる。

我々は皆イスラエル国家の幸福を願っている。我々は皆、教育、社会事業、医療、社会基盤の発展のために国家が資金を注ぐことを望んでいる。しかし、占領状態を維持するため、政府は占領地や入植地、道路などに配備する軍隊の維持に膨大な資金を費やしている。政府は軍事予算を拡大するため、一般予算を削減している。占領およびそれが引き起こす暴力は、経済を弱体化させ、不況を引き起こしている。投資家は去り、旅行者は寄りつかず、経済のあらゆる部分が崩壊している。

社会構造の強化のためにお金を使った方がいいのではないか？

ぼろぼろになった医療と教育システムのために資金を費やした方が？

これ以上の入植を行うことは、高齢者、障害者、失業者を結果として切り捨てることになるのではないか？

占領を終わらせよう。公的な分配を、入植地ではなく、社会的弱者に！

兵士よ、占領は軍を蝕んでいる。

占領は軍隊と兵士たちにとって有害だ。兵士たちは占領地で、入植地や入植者専用の高速道路の警備、パレスチナの町や村への配備などの日常業務に多くの時間を取られ、訓練は中止されている。

兵士たちは非人間的な環境で働くことを余儀なくされている。たとえば機甲部隊の4人の兵士が戦車の中で234時間を過ごした例がある。占領を維持するために、交替が許されなかったのだ。

軍の情報筋は、占領のための日常業務により兵士たちが消耗していることを認めている。消耗は健康状態を悪化させ、事故を誘発する。防衛のために本当に必要なことに時間を使った方がいいのではないか？

占領が終われば、イスラエル軍の戦闘能力が回復できる。予備役に負わされた重荷を減らし、徴兵された兵士たちがよりよい状態で軍務につけるようにした方がいいだろう？ 占領を終わらせよう 兵役を2年にしよう！！ 予備役の負担を減らそう！

兵士よ、

まっとうな人間は、命令を受けても犯罪に加担しない。

まっとうな人間は、家を破壊したり、子どもや女性や赤ん坊を殺すことはない。隣人を飢えさせることもなければ、私やあなたのような普通の人々が医療を受けるのを邪魔することも無い。

この状態は、イスラエルのモラルの質を低下させている。

「安全のため」と説明されてはいても、実際には人々に危害を加えているのだ。すべての「掃討作戦」は、自爆行為を起こさせるもとになる。あなたが今日傷つけた子どもが、明日のテロリストだ。

兵士よ、変えるのはあなただ！

絶対確実な解決策はない。良心と、信念と、あなた自身が感じたことに従い、心を決めるのだ。

決めるのはあなただ。私たちにできるのは、多くの、本当に多くの兵士たちが、戦争犯罪に「NO！」を唱えたことを伝えることだけだ。

レバノン戦争から現在のインティファダまでの間に、徴集兵も予備兵も、何千人もの兵士が勇気をふるって「NO！」と言ったのだ！

拒否することを決めるのは、その人自身だ。しかし、一度心を決めたら、私たちが差し伸べている支援の手を見つけることができるだろう。》

この「兵士への呼びかけ」全文をここに転載したのは、単にその内容を知りたいからだけではない。「兵士」への呼びかけを、我々が誰かへの「呼びかけ」へと変換する機会をつくりだして生きつづけることをたえず願っているからだ。イスラエル国内で兵士にむかって呼びかけられているこの文書に、国境を超えてまっすぐに向き合うなら、文書中の言葉は我々めがけて一直線に飛び込んでくるにちがいない。《我々がしていることは、～の連鎖を終わらせる方向へ向かっているだろうか？》もしあなたがたたかうことを放棄していなければ、あなたもまた、あなた自身のたたかいに要請されている「兵士」にほかならない。《兵士よ、変えるのはあなただ！》という言葉は、`決めるのはあなただ`という声を伴って、鋭く突き刺さってくる。どのような「呼びかけ」もあなたが望む度合いでしか、あなたのものにはならないことを知らなくてはならない。

イエシュ・グブウルは潜在的な兵役拒否者に対して、「今までの経験から言えるのは、兵役拒否の決心が固い兵士の多くは比較的軽い処罰を受けたり、または何の処罰も受けて済む。が、優柔不断に感じられたり、脅迫に屈して自分の信念を曲げそうな兵士にはより厳しい処罰が科せられる場合が多いと手引きに記し、刑務所での生活についてもこう説明している。

《刑務所に拘束されているあいだ、予備役兵として社会保険からもらえるはずの手当が取り上げられてしまう兵役拒否者は、イエシュ・グブウルの支援金を申請することができる。また、イエシュ・グブウルは兵役拒否者と家族とのパイプ役を務め、兵役拒否の決断に対していただつ家族を説得することにも協力している。

一般的認識とは対照的に、刑務所に入れられた兵役拒否者は看守や他の囚人からは嫌がらせを受けたりしない。刑務所に入ったことのあるイエシュ・グブウルのメンバーは全員、「敬意をもって扱われた」と報告している。手帳は刑務所の中の状況や日課も説明している。4～5回の行進、軍事用品の仕分け作業、作業をしないという選択もある。「兵役拒否者は刑務所内で読書をしたり、大学の課題に取り組んだりして、時間を過ごすことができる。刑務所内には本、新聞、文房具などを自由に持ち込むことが許されている」

刑務所内の食事は軍隊食で、囚人は毎日10本のタバコを配給される。模範囚の場合、刑期は10日間のうち1日が免除される（たとえば、28日の刑期の場合、模範囚は26日で出所できる）。また面会の手順や刑務所内の公衆電話の数、刑務所内での振る舞いについてアドバイスが記載されている。「入所時はショックが大きいかもしれない。最初の2日くらいはどなられるなど看守が権威を誇示するための「洗礼」を受けるかもしれない。だが、そのような状況はふつう数時間で終わる。最初の1日、2日くらいは少々呆然とするかもしれないが、他の囚人が面倒を見てくれて基本的なことを教えてくれる（お湯がいつ出るのか、何がいちばん易しい作業なのかなど）」

『イスラエル 兵役拒否者からの手紙』には予備役兵のみならず、「**アリエル・シャロン首相へ**」（2001年8月）に向けた「**高校生62名の署名入り手紙**」も掲載されている。

《ここに署名した若者は全員がイスラエルで生まれ育ち、まもなく国防軍の召集を受けることになっています。私たちはイスラエル政府とその軍隊が行使している攻撃的、差別的政策に抗議します。そして、このような政策の実行に参加する意志がないことを宣言します。

私たちは、イスラエルが人権を踏みにじっていることに強く抗議します。土地の没収、逮捕、裁判抜きでの処刑、家屋の破壊、道路封鎖、拷問、医療活動の妨害などは、イスラエル国家が犯した犯罪の一部にすぎません。これらはすべて、イスラエルが批准した国際法にもはなはだしく違反しています。

このような行為は不法であるというだけではありません。政府も軍も、市民の個人的安全を確保するという所期の目標を達成できていません。市民の個人的安全を確保する方法はただ一つ、イスラエル政府とパレスチナ人が公正な和平を結ぶ以外にありません。

上記の理由により、私たちは自分の良心に従うことに決め、パレスチナ人に対する抑圧行為に参加することを拒否します。このような行為こそテロと呼ぶべきです。私たちは、同世代の若者、徴集兵、常備軍の兵士、予備役兵が同じ決断をするように呼びかけます。》

この「署名入り手紙」は、《2001年8月、高校生のグループが、シャロン首相その他の閣僚に手紙を書き、自分たちは占領地域における抑圧政策に参加するつもりはないことを明らかにした》と説明されており、《この手紙には現在（2002年9月17日）までに215名の生徒が署名している》という。ここにはその手紙を送った高校生グループの18歳の二人の手紙も掲載されている。

「入隊する者としめない者」（2002年8月18日・18歳）と題するウリ・ヤーコビの《手紙は入隊を二日後に控えた8月18日に、イスラエルの代表的な日刊紙「ハアレツ」紙に寄稿したものである。》

二日後になっても私は軍隊には入りません。私は他の徴集兵といっしょにバスに乗り、受け入れキャンプでバスを降ります。でも、他の徴集兵とは違って、私はこの徴集を拒否します。そして監獄に送られることになると思います。そこでは、いっしょに『高校生の手紙』を書いた仲間には会わずです。私たちはその他多くの人々と同様、イスラエルが占領地区で展開している戦争は、「闇に従う者に対する光の子らの戦い」ではないと考えています。歴史上の戦争の多くもまた、そのような戦いではありませんでした。

外国のメディアからは、イスラエル軍の戦車が地響きを立てながらパレスチナの市街を通過しているというニュースが流れてきますが（どうしたわけか、イスラエルのメディアはこういったニュースを報道しないのです）、事実はそのだけではありません。イスラエル国防軍が占領地域で行っているのは、戦車で民間施設を破壊したり、路上バリケードに陣取った兵士が女性や子どもを足止めしたり、パレスチナ市民を手荒くあつかったりといった状態を超えています。悲しいことですが、これが事実なのです。イスラエル軍の兵士はきわめて困難な状況に置かれています。なかには間違いを犯す兵士も出てきます。しかし、間違いではすまない場合もあります。テロリストとは何の関係もない子どもや老人を殺害し、大家族が暮らしている民家を破壊したりするのです。これこそ「テロ」と呼ぶにふさわしい行為です。こういった行為はすべて許されません。私はこういった行為に関与することを拒否します。彼らが行っているのは正義ではありません。このような行為に道義的な正当性を認める世界は間違っています。植民のための土地を広げようとするのは絶対に間違っています。イスラエル市民に対する攻撃が正当でもなく道義的でもないのと、まったく同じことです。

パレスチナ当局が和平を求めているのかどうか、私にはわかりません。パレスチナの人々が貧窮と不利益に甘んじていくつもりなのかどうか、私にはわかりません（ただし、彼らがそんなことを望んでいるとは思えません）。私にわかっていることは一つ、パレスチナ人は占領者としての私たちを望んではないということです。パレスチナ人は、戦争に明け暮れて毎日のように血が流される暮らしを望んではいません。パレスチナ人

は、占領継続を求めてなどいません。占領を続けているのは私たちであって、彼らがそうさせているわけではないのです。

私は自国民を誇りに思っていません。私は祖国を誇りに思っていません。私は私の安全のために行われている作戦を誇りに思っていません。占領地区での軍務を拒否して投獄されることも、誇りには思っていません（自分の信念のために苦しむ機会を得たことで、はしゃいでいるわけでもありません）。私は自分の良心の声に従っていることを、誇りに思っています。他の人が、上官の命令ではなくて各自の良心の声に従ってくれるなら、それが私の喜びです。

高校生グループのリーダーである**ハガイ・マタール** は、《2002年10月23日、18歳で召集を受けた日にこの声明を発表。同日、入隊拒否のかどで投獄される。》

2002年10月23日、私は、政治的立場に従って軍事刑務所に送られます。私の政治的立場は国防軍への入隊を受け入れません。

私はまだ18歳ですし、イスラエルの過去の記憶を背負っているわけでもありません。しかし私は、イスラエルは過去に例がないほど低い道徳状態に達してしまったと心の底から思っています。このどうしようもない凋落は、バラク前首相による一方的な合意をパレスチナ人に強要するだけの「寛大な提案」とともに始まりました。現在、ユダヤ人のあいだでは軍国主義と民族差別がファシズムのレベルにまで達しています。批判的な意見を抑圧し、占領政策による犯罪を全面的に肯定し、軍隊を理想化して「民族浄化」策を承認しつつあるのです。これらは、私たちの社会を崩壊させる要因の一部ではありません。このリストにはまだ先があります。イスラエル国内のパレスチナ系市民に対する組織的虐待、平和デモに向けられた暴力的な妨害、障害者や弱者への心ない態度。これらすべてを理由として、私は軍隊への協力を拒否します。

良心の声と、過去における同じような状況が教える人間の道に従うならば、私はイスラエル軍への入隊を「拒否せざる」を得ません。イスラエル軍は「防衛軍」と名乗っていますが、これはウソです。私は入隊拒否を余儀なくされているのです。帝国主義の時代にこの土地の人々が味わった抑圧、北アメリカで奴隷と先住民族がなめた苦しみ、アルジェリア独立戦争、南アフリカのアパルトヘイト。これらすべての先行事実が、私の入隊拒否を不可避なものにしました。祖父が第二次大戦中にとった行為、ナチスのファシズムに対する彼の戦い、そして人道に対する彼の信念。これらもまた私を入隊拒否へと導きました。私は自分の家庭で抑圧と正義について学びました。現在のような状況で直面する不正に対しては、こうする以外に方法はありません。

今日は私の人生で大きな意味をもつ日です。家族や友人が私を支えてくれます。私は、闘いを共にする見知らぬ勇敢な仲間たちに感謝したいと思います。まっとうな暮らしができる希望もないのに、イスラエル市民に対する暴力的な手段に訴えることなしに、占領政策を堪え忍んでいるパレスチナ人。日々の侮辱に耐えながらも共存への道をさぐっているイスラエル国内のパレスチナ系市民。これまでに受けた教育にもかかわらず占領政策への参加を忌避した若者。占領地区において身を挺してパレスチナ人を守っているヨーロッパの平和活動家。右派の家庭に育ちながらアラブ人青年と恋に落ちて家を追い出された私の友人。刑務所で国家と軍隊に敬礼することを強制されたときには、誠心誠意をこめてこれらの勇敢な友人たちに礼を捧げます。私は彼らほど立派ではありません。彼らは全員が、私以上の犠牲をはらって平和を求め、占領に反対しています。

《テロリストとは何の関係もない子どもや老人を殺害し、大家族が暮らしている民家を破壊したりするのは、これこそ「テロ」と呼ぶにふさわしい行為です。こういった行為はすべて許されません。私はこういった行為に関与することを拒否します。彼らが行っているのは正義ではありません。このような行為に道義的な正当性を認める世界は間違っています》と、18歳のウリ・ヤーコビははっきりという。もし世界がこの行為を許すなら、自分はこのような世界には加わらないし、世界とたたかうという固い決心すら感じられる。自国も祖国も誇りに思っていないし、パレスチナの掃討作戦も誇りに思っていないと同様に、《占領地区での軍務を拒否して投獄されることも、誇りには思っていない》ないが、《私は自分の良心の声に従っていることを、誇りに思っています》と、高らかに謳い上げる。

《自分の良心の声に従》ということは、自分が納得しないことはしないということである。そのようにして生きることを宣言しているのだ。《他の人が、上官の命令ではなくて各自の良心の声に従ってくれるなら、それが私の喜びです》と控えめに述べているが、耳をもっと傾けるなら、占領地区での軍務に従事している人たちは、本当に自分が納得しながら女性や子どもや老人を無差別に殺害しているのか、という声が聞こえてくる。上官の命令の所為にしてはいけない、あなたがあなた自身にとって本当に納得していることを行っているかどうかということなのだ。もしあなたが本当は納得しないと思っているなら、あなたは自分が納得するように生きてください。「誇り」というものはそこから築き上げられていくものだと思います。彼がそういっているのが、私の耳に鳴り響く。

同じ18歳のハガイ・マタールは、自分は《イスラエルの過去の記憶を背負っているわけでも》ないと冒頭で述べながらも、《帝国主義の時代にこの土地の人々が味わった

抑圧、北アメリカで奴隷と先住民族がなめた苦しみ、アルジェリア独立戦争、南アフリカのアパルトヘイト》等の先行事実の中に、《祖父が第二次大戦中にとった行為、ナチスのファシズムに対する彼の闘い、そして人道に対する彼の信念》を挿入して、自分の国防軍への入隊を捉えようとするとき、彼は明らかに自分自身を一個の歴史的存在として意識し、位置付けようとする。その歴史的存在として「パレスチナ」問題に立ち会うなら、《現在、ユダヤ人のあいだでは軍国主義と民族差別がファシズムのレベルにまで達しています。批判的な意見を抑圧し、占領政策による犯罪を全面的に肯定し、軍隊を理想化して「民族浄化」策を承認しつつある》という現状認識は、我々ユダヤ人がパレスチナ人に対して行っている「民族浄化」策は、第二次大戦中にナチスドイツが我々ユダヤ人に対して行ってきた「民族浄化」策と同等であることを照射しているのだ。

以上の二人を含むイスラエル高校生62名連名の「兵役拒否」は2001年9月6日付ヘブライ語新聞紙上に発表され、《対パレスチナテロに団結するイスラエル社会のど真中に落とされた爆弾のようなショック・ウェーブをもたらし、国内は騒然となった》と、現地在住の建築家井上文勝がレポートしている。

《ただちに出た賛同者として前イスラエル文部大臣シュラミット・アロニ女史からの「すばらしいことです。がんばってください」などがあったが、現シャロン連合政権のパレスチナ対応を告発し続ける野党「極左」派メレツ党首ヨシ・サリード氏から「君たちは間違っている。国民義務の兵役はしなければならない」との拒否者たちにとっては思いがけない声明が出され、有名な「ピース・ナウ」でさえ沈黙するなか、「パレスチナからの無差別テロで無実の人々が殺されてゆく今、何故に！」との攻撃が雨あられとなって降ってきた。拒否者の一人、ハガイ・マタール君には「近所の者から」と題し、「君を子どものころから知っている者として書く。君は腰ヌケの反逆者になった。パレスチナテロリストの共謀者だ」との手紙さえ届いた。

一方、内外のアラブ語紙は「イスラエルの革命！」と報じた。そんななか、2000年9月30日にガザにての交戦中、テレビカメラが目撃するなか、父と共にピン止めされ、ついに死んでゆく世界の同情を集めた少年モハammad・アル・ドーラ君の父とほか数人のパレスチナ人遺族代表たちからは「あなた方の勇気ある行動に心を打たれました。このような行動こそが流血を止めるのです」とのメッセージが送られてきた。

しかし、この大騒ぎは6日後の9月11日、世界を震撼させたアメリカでの大惨劇「同時多発テロ」に飲み込まれてしまったかのように見えた。同情の涙でテレビ画面に食い入るイスラエル人……。》

レポーターは《エルサレム近郊ではあるがイスラエル軍占領下のパレスチナ村に30年念住み続け》て、《イスラエル政府からの永住権をもっている》ために、非ユダヤ人のアメリカ人母親をもつ長男のような《非ユダヤ人さえも当国では兵役対象とされ》、

長男に《11月下旬の17歳の誕生日お祝いカードの代わりに兵役準備通告書が届けられた》ことや、《たぶん「兵役拒否」をするであろう子をもつ一人の「父」として、彼らに会い心情を理解したい、と思った》と記している。

レポートによると、《「拒否」を公表したのは6名で、その後彼らも含めた総計62名による連名宣言があった》。その後、《一年後の2002年11月現在250余名にふくれあがっている》。彼らの入隊拒否の第一理由は、《一様に「イスラエル軍によるパレスチナ弾圧の非道さ》であり、この心情はイスラエルの平和、反戦団体の「伝統」として子どもたちに受け伝えられている。取材対象の高校生の両親には反戦、平和活動家が多いが、《反面、家族の大反対をしりぞけて「拒否」を実行した者は極少である。》ヤイール・ヒロ君と彼の友人、イガール・ローゼンバーグ君がそうであり、《初めは「何しに来た」からだんだん「お茶飲む？」に変わっていたヤイール君の両親はともかく、ハイファ在のイガール君の場合となると、遠方から来た我々クルーをアパート上階の窓から見たお母さんは「彼らメディアがあんた方をそそのかしている。絶対家に上げるな」とイガール君に言いわたし、以後、我々の取材は公園ベンチやコーヒーショップになってしまった。》

ヤイール君の《60歳代にしては若い父さんモニはシリアで生まれ、1950年代、祖父母に連れられてイスラエルに着いた。当時アラブ諸国で起こったユダヤ人迫害の難をのがれるためである。しかし、貧困にくれる家族は親せきをたよってメキシコに渡るが、ここでもうまくゆかず再びイスラエルに戻った。そのときすでに19歳になっていた彼は「祖国のため！」と最も危険な落下傘降下部隊に志願する。そして1967年に勃発した第三次中東戦争ではエジプト戦線、そしてエルサレム解放戦に参加した。さらに1973年に第四次中東戦争においても、予備役兵士として活躍した。典型的イスラエル国民である。》

ヤイール君の家の姓である「ヒロ」はアラブ語姓で「甘くおいしい」の意で、《当時アラブ諸国に住んでいたユダヤ人たちが自らの姓名を自主的にアラブ語名に近くした》のである。ヤイール君は「そうなんだよ。それで『お前はアラブ人だろ』とポリ公に捕まったこともあるんだ。でも今我々に弾圧されているパレスチナ人の姓名をもって光栄！」と笑う。ヤイール君一家のような《アラブ系ユダヤ人たちは、ここに先来し、建国を為したヨーロッパ系ユダヤ人たちから「プリミティブ」と見下げられてきた》ために、彼らにとって、《平等と尊敬を自力で勝ち得る》唯一の場所がイスラエル軍だった。《だからこそ軍への想いが深いお父さんモニにとって、年増して生まれた長男ヤイールには自分を継ぐ戦士となることを願う一方、そのようなことがない平和がくることを願うという、一見矛盾した生活を送ってきた。現在、テルアビブ近郊のペタク・ティクバで家屋斡旋業を営んでいるが、第二次インティファダ以来、仕事は低迷するばかりである。》

戦争によって聖地への観光産業は低迷し、9年前のオスロ合意を機に林立したホテルも閑古鳥が鳴き、投資家が遠のいた《イスラエル側では、建設スランプとそれに続く家屋、アパート購入がめっきり途絶えてしまった。よって、父モニさんは毎日、空白の通勤を続けている。ちなみに当紛争の結果としてイスラエル国内の失業率は実に12%を超え、5名に一人が最低生活以下を強いられている。飢える市民のためにNGOの炊き出しセンターがキノコのようにあちこちに出現し、休暇でも帰る家のない兵士たちさえ行列の中に入っている。そして、戦争とその結果の社会的プレッシャーの二重ガマの中でぶつかり合うネガティブ・エネルギーは、家庭内暴力となって新聞紙上を毎日にぎわせている。

モニさんは言う。「仕事のない事務所で他の所員との話は、テロ、交戦、その結果の経済、そして我々の子どもたちのことだ。この前、同じ年の息子をもつ者が『入隊したんだ。泣いてしまった。で、君の子はいつ?』と聞いてきた。つい『恥ずかしいが、拒否だ』とうらやましく言ってしまった。でも彼は、『しかたないよね、こんなことになったのも俺たちのせいかもしれない……』と言ってくれたが……」

彼の妻アリザといえ、仕事先の国防省のコンピュータ・センターから家に戻ると、どうしたらいいの……?」と一人つぶやきながら台所に立つ。彼女のささやかな夢とは。「コンピュータの虫」の息子ヤイル君が晴れて兵役をまっとうして自分のような仕事につくことだ。そしてひとり立ちしてくれること。拒否をすれば一生涯、国の仕事にありつけないのだ。

「……でも、こんな危険時に入隊して『万が一』がなくなるんだから『お母さん』としてはホッとでは?」と聞くと「……そりゃそうよ。血を分けた息子よ。でも、あの子、兵役しなくちゃ将来がないのよ。家が欲しくなってもローンはダメ。大学へ行くっていても奨学金もダメ。どこでもドアが閉められてしまう。ほかの家のおぼっちゃんたちは遊びで兵役拒否ができるわ。でもこの家ではそんな余裕はないの……あの子はそれがわかってないの」と言う(…)

《出頭日12月5日の早朝、テルアビブで近くのテル・ハショメール徴兵センター、息子ヤイル君を送り届ける車のハンドルを握るお父さんが言い出した。「……まず……俺は右派リクードのサポーターだ。しかし我が国とパレスチナがオスロ合意にサインしたことを両手広げてウエルカムした。だから次の選挙では労働党に投票した。しかし、こんな流血のドロ沼になってしまって……双方で無実の人々が死んでゆく。パレスチナ人たちの苦渋もよく知っている。しかし、これはあのアラファタギャング共がやったことなんだ。やつらをどっか遠くへ追放して新しい世代と平和を契らなければならない。ただ、それまでどのくらいの人が死ぬか……」。ちょっとだまって、今度はわめきだした。「この横のバカ息子が兵役拒否!と騒ぎ出したとき、耳をうたぐった。悲しかったし、

恥ずかしかった。しかし、彼らに対する軍の対応を見ているうち、一つの疑問がわき上がった。まず、息子と同年齢でも神学生とかちょっと頭が痛い、とかさまざまな勝手な理由で『辞退』する者たちに軍はドーゾ、と出口のドアを示す。しかし、へ理屈でも自分なりの『信条』で堂々と『拒否』するこの子たちはブタ箱に投げ込んで最後には『頭がおかしい』との理由での釈放だ。軍がちゃんとして兵役拒否を認めればこんな騒ぎはなかったんだ！……それにしても、こいつは（と隣席で青くなっている息子をひじでこづいて）バカなりに堂々と出頭して、堂々とム所に入る……。ちょっと見なおした」と、後席の私をバックミラーで見て笑った。この時点で、第三次中東戦争の英雄たる彼は自分が息子の兵役拒否の「共謀者」になってしまったことについて気づいていなかった。》

テル・ハシヨメール徴兵センターの正門の中に父親に肩を抱かれてヤイール君が消えると、《拒否者諸君がワッとプラカードや字幕を掲げた。読む人たちの顔がこわばった。「イスラエル軍の戦争犯罪に加担するな！」「兵役拒否こそが答え！」等。「バカ者！」「はずかしくないのか！」「言いたいことは選挙で言え！」「反逆者！」との入隊者家族の罵声の中、出動した警察との押し合いが始まった。》

《ヤイール君の第一期拘束は通常通りの28日間であったが、食堂係になった彼がヤケドをしたこともあって、三週間ほどで帰宅をゆるされた彼を父さんが例の第六刑務所へ迎えに行った。帰りの車中で母さん手作りのポテト・パイをパクつく息子に「何？ 国境なき世界？ どうやってつくるんだ！ イスラエルの国境がなくなったらお前も含めた我々は皆殺しにされるんだぞ！」といきまいていたお父さんだったが、家に着くや、口笛を吹いて玄関に向かう息子の大きなバッグをかついでヨロヨロ続くこの父さんの姿を見た我々は、「親バカの極限だ」と言いながら涙した。

「拒否者」への軍システムは一応こうだ。一度拒否して服従させられた者は21日または28日間後、数日の帰宅を許される。そしてまた元の徴兵センターに出頭して「気持ち」を変えて入隊しなさい」と責められる。それを拒むと元の第六刑務所帰り、と通常三回のくり返しが始まる。しかるにヤイール君の場合は28 + 28 + 28 + 14の4回だった。

そして体格のよいイガール君は実に21 + 28 + 14 + 14 + 14との5回、つまり91日間の服役を強いられた。これらを見ると軍は、今回の兵役拒否「つぶし」により以上の努力をしているのだ。

刑務所生活について記すと、徴兵センターで兵役を拒否した者は近くの第四軍事刑務所に入れられる。数日間のことであるがここで一度頭を冷やさせ、それでもだめならば北方の第六刑務所に送られる、とのようである。

その第六刑務所とは周囲を鉄条網で囲まれ、監視塔も建つものであるが、中に入ると食堂、オフィスなどのバラック以外のテント生活が待っている。野戦陣営の生活である。

ここでは兵役拒否者もヨレヨレの軍服の一兵士となって朝6時起床から夜10時消灯まで、行進、整列での訓辞など軍隊そのものだが、銃の代わりにスコップ作業、時間が空けば各所から送られてきた古制服のボタン外しなどをする。ところで、ヤイール君入所中の人口は約120名で兵役拒否は彼一人だけ。皆からいびられたのでは？ との我々の心配に反して皆友達づき合いだったとのこと。その「友達」とはアル中、麻薬中毒者、脱走者、軍資材ドロボー、上官命令拒否等さまざま。そのうち軍務拒否将校が入ってきたがすれ違いで出てきたとの話。面接は10日に一度ぐらいだったが、差し入れ食物はその場で目を白黒させて食べる。テレビなし。ラジオなし。

そして、レジャーは？ との質問に、あの歌を合唱してたよ、と言う。あの歌とは今のイスラエルの心を代表すると、大ヒットした「我々のゆく路」:

...やさしくない、我らの路はやさしくない

そして時折君の瞳はとても悲しい

でももっと花咲く野原が前途にある

もっと高い山波も

涼しい風の頂きも.....

》

ヤイール君が入隊拒否をしたテルアビブ郊外テル・ハシヨメール軍事基地を取材すると、《軍服以外「どこから見てもお母さん」の中年女性指揮官殿の直々の案内で、家族に見送られて入所した高校卒業生たちが軍服、軍靴、ベレー帽の一兵士に変身するまでの全プロセスを見学したが、涙する父母たちに見送られバスに分乗して所属各部隊へと去ってゆくシーンも含めて、どこも「入学」的雰囲気ばかり。つい、「学校みたいですな」と口をすべらすと彼の指揮官殿が「そう。このあたしが校長ってこと」と笑う。

では、このすきをねらってと、「今、大問題になっている兵役拒否の子どもたちは？」と突いてみると、「その件については部門が違うのでお答えできませんが、子どもをもつ一人の母親の私個人にとって彼らは『不登校生』です」が返ってきた。

ここイスラエルでは高校卒業直後から男性三年、女性一年9か月の義務兵役があり、それを「卒業」してから、フルな「社会人」と認められて大学へ進んだり職業をもつとされている。

よって高校最終年にもなると、クラス全員が「どの部隊へ？」の話で持ち切りになるなか、唯一人「自分には行かない」とする者はまず「臆病者！」とツマハジキになることを逃れ得ない。考えるに彼ら拒否者にとってこれこそが最も苦しい体験であろう。実にハガイ君、そしてヤイール君も高校中退である。》

基礎訓練の重要ポイントたる射撃訓練を訪れると、《ずらりと腹ばいになった頬赤らめる「新兵」たちが二脚付半自動小銃で約50メートルの標的を実弾で撃つ。命中合格した者が次々と出てゆくなか、残されての泣き顔での彼らに寄り添った女子指導官がま

さに「手取り、足取り」で彼らをリードしていく。「これができなかつたらピンタか？」
「で、不合格者のバツは？」と彼女に聞くと、「もうすぐの昼食に遅れちゃうわ。さあ早く撃って！」と兵士をはげました。

基礎訓練のけじめとして、重武装で約20キロメートルの荒地をつつ切る行軍がある。これを完遂したときに実戦兵士として「卒業」するのだ。エルサレム郊外のレウートと呼ばれる森林地帯での当イベント(?)に参加取材した。

各地からバスで乗り込んできた新兵たちは、各小隊グループになつての装備点検後、輪になつた各グループは引率将校からの訓辞を受けた後、一様に何かを叫んだ。そのかけ声とは「イスラエル万歳！」でなく「名誉、家族、最上！」つまり「誉れ高き兵士であること、家族を守るため、そして最上の勇士であること」だつたのだ。

準備完了の兵士たちが各小隊旗を先頭に隊列をかためての早足で森の中に消えていくや、父母たちの車がワッと彼らの後を追い始めた。真なる運動会。ああ、ヤイール君のお父さんも、こうやって走る我が息子の後を追いたかつたんだとしみじみ思った。あたりはもう暗くなつていた。

一方、エルサレムの小丘上にある国立ホロコースト記念館「ヤド・バシエム」では、女子兵士の引率教官が我々の質問に答え、「ここで兵士たちは『家族の三分の一を殺された遺族』として、自らの国をもち、自らを守ることの大きさを学ぶのです。そして、そのことを通して他民族への寛容も学ぶのです。たとえば、検問でパレスチナ人を人道的に対応せよとのことなのです」と言うのであつた。》

さて、《三か月強の服役で「自由人」となつたヤイール君は自分の町ホッド・ハシヤロンで、以前バイトをしていたが兵役拒否！と叫んだ彼を追放したのは別なベーカリーで、パンを焼きながら「国境なき世界」実現のために子分を集めている。》

レポートの最後に、拒否者たちがデモなどで好んで歌う、67年の第三次中東戦争直後にヒットした「君と僕」を載せている。

君と僕とで世界を変えよう
そうすれば皆もついてくる
僕よりずっと以前に誰かも言ったことだけれど
それはどうでもいいんじゃない
君と僕とで世界を変えよう
君と僕とでやってみよう
もちろん、初めから苦しいだろうけど
いいんだ！ そんなに悪くない...

2004年7月11日記

